

天使たちに優る御子

■前回までの流れ

8月から、「ヘブル人への手紙」を学んでいます。

これまでに、「イントロダクション」と「テーマ」を見ました。

まず「イントロダクション」で、ヘブル人への手紙の全体像を学びました。手紙の著者は誰か、受取人たちは誰か、彼らはどのような状況の中にいたのか、などでした。

今回は、1章1節から3節までの箇所から、「テーマ」を扱いました。著者は、あいさつ文なしで、冒頭から本題に入り、中心テーマを「御子の優位性」と示しました。緊迫した時代の雰囲気が感じられました。

■ヘブル人への手紙の構成と今回の内容

二つの主要な区分	内容	箇所	警告
第一区分： 神学的理論を中心に (適用としての警告 も含む)	テーマ	1:1~3	
	天使たちに優る御子	1:4~2:18	警告① 2:1~4
	モーセに優る御子	3:1~6	
	警告	3:7~4:13	警告②
	レビ族アロンの家系の祭司に 優る御子	4:14~10:18	警告③ 5:11~6:20
第二区分： 適用(御子の優位性を 理解した上での、信者 の歩み)	勧めのための2つの基盤と4 つの勧め、警告、励まし	10:19~39	警告④ 10:26~31
	生きた信仰の証明	11:1~40	
	信仰を持ち続けることの勧め	12:1~29	警告⑤ 12:25~29
	まとめとしての勧め	13:1~25	

今回は、天使たちに優る御子 1:4~2:18を学びます。

ポイントは、御子は、神であり同時に人であるお方「神-人 (God-Man)」だということです。神であれば、天使よりも上であるのは当然です。この点を、旧約聖書から7か所の引用をして証明します。

また、人としての立場でも御子は、十字架の死を経て天使に優るお方となりました。この点を、メシアの王国での統治権とメシアによる救いという二つの観点から説明します。

この教えの途中で、警告①が語られます。第一区分の神学的理論は始まったばかり、まだ第一の比較「天使」を教えている途中ですが、そこまでに語ったことだけでも、御子がどれほど優れたお方かがわかるので、ぜひとも信仰にとどまってエルサレム滅亡に巻き込まれないように、という著者の切実な願いが伝わってきます。

■本日の内容 「天使たちに優る御子」

1. 御子は神であるがゆえに、天使たちよりも優る：旧約聖書からの証明 1:4~14

(1) 4節の書き出しは、原文では「それだけ御使いよりもまさるものとなられた」

- ① 当時のユダヤ教神学においてラビたちは、天使たちを尊重していた。それに対して、著者は、「御子は、天使たちよりも、『まさる（より良い）』お方であると教える。
- ② 「なられた」というのは、どういう意味か。
 - 子なる神は、その神性において元々、天使たちよりも優る存在である。
 - その神であるお方が、ナザレのイエスというひとりの人において、人間としての肉体をもたれたとき、そのお方は天使たちよりも少し低いものとなられた（2:9）。イエスは、神であり同時に人であるお方（「神一人」）
 - そのお方が、復活、昇天、そして神の右の座に着くという3段階の高揚をもって天にお帰りになったとき、そのお方は再び天使たちよりも優るものとなられた。
 - 神の右の座に着かれたのちも、そのお方は「神-人」である。人であるという面でも、天使たちよりも優るものとなられた。このことは2:5~18で説明される。

(2) 4節は次にこのように続く、「御子は、御使いたちよりもさらにすぐれた御名を相続された」

- ① 父なる神は、御子にある特別な名をお与えになった。
- ② 黙 19:12 メシアが再臨するときには、ご自身のほかにはだれも知らない名が書かれている。
- ③ ピリ 2:9 メシアは、すべての名にまさる名を父なる神から受けた
- ④ これは、イエスという名ではない。「さらにすぐれた御名」については、メシアご自身以外知るものはいない。私たちは決して知ることはないであろう。

(3) 5節から13節では、旧約聖書から7つの引用をして御子の優位性を証明する。

- ① 5節 a 詩 2:7 御子が相続者となった
 - 「あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ」：きょう誕生したということではなく、父親が成人した息子に対して、あらためて自分の実子であり、相続者であるということを宣言する法律用語。長子の相続権を持つことを強調する。
 - 旧約聖書では「神の子ら」=集合的に天使たちを指す。一人の天使を指して「神の子（単数）」と書かれている箇所は全くない。
 - 新約聖書では「神の子たち」=集合的に信者たちを指す。養子としての神の子たちである。
 - 神が「わたしの（ひとりの）実子」と呼ぶのは、メシアだけ。天使にも信者にも言わない。

- メシアの公生涯の中で、「わたしの子である」との宣言は3回（受胎告知ルカ 1:35、受洗マコ 1:11、変貌ルカ 9:35）。最終的に相続者となるのは復活による（ロマ 1:4）。よって、ここの「きょう」は、復活の日。
- ② 5節 b I 歴 17:13 御子がダビデ契約を成就する
- ダビデ契約（IIサム 7:11b~16、I 歴 17:10b~14）
 - 3つの永遠のもの：永遠の王、永遠の王座（王朝、家）、永遠の国
 - 永遠の王＝「神一人」であるメシアがダビデの子孫として現れ、イスラエルを統治する（イザ 9:6~7）
 - メシアの王国が始まる前に、イスラエルは霊的新生を体験し、世界離散から帰還して、神の民として回復されている。また、王都はエルサレムである（エレ 23:3~8）
 - 天使には、メシア王国においてイスラエルを支配する権限は与えられていない。
- ③ 6節 申 32:43、詩 97:7 天使たちが御子を礼拝する
- 6節「さらに（再び）長子をこの世界に送るとき」＝メシアの再臨のとき
 - 長子とは、メシアのタイトルのひとつ（詩 89:27）。新約聖書では、ロマ 8:29、コロ 1:15。
- ④ 7節 詩 104:4 天使たちは、仕える者たちである
- 詩 104:4 神は、風や火をご自分の使者として用いる
 - ユダヤ教での解釈「天使たちは風や火と合体して、神に仕える」→天使たちは神に仕えるときに、その姿を変化させることになる
 - これに対して、御子の王座は世々限りなく（8節）、御子は変わることのないお方である（12節）。
 - 「仕える者たち」と訳されているギリシア語は、「一般的な労働をする奴隷」ではなく、「宗教上の献身者」を意味する。
- ⑤ 8~9節 詩 45:7~8 御子は神であり、メシアの王国での主権者である
- 御子は神である。よって、すべての天使の造り主であり、主人である。
 - 御子は永遠の王座を持っている。天使たちは誰も持っていない。
 - 御子は聖霊によって油注ぎを受けた。天使たちは誰も受けていない。
 - 「あなたとともに立つ者（たち）にまして」＝天使たちの上に位置して
 - メシアが聖霊による油注ぎを受けたのは、洗礼のとき（使徒 10:38）
- ⑥ 10~12節 詩 102:25~27 御子は宇宙の創造者であり、支配者である
- 御子は主である。
 - 御子は宇宙の創造者である。
 - 御子は宇宙の中の諸変化を支配しておられる。
 - 御子は変化していく宇宙の中で、変わることのない主であられる。
 - 御子は永遠である。
 - 御子は永遠であるが、この宇宙は古びて、着物のように取り替えられる。

⑦ 13節 詩 110:1 御子は神の右の座に着いている

- 御子は、父なる神のパートナーとして父のみわざを行うお方である。御子が座っているのは、その任務が完了したからである。
- 古代社会では王の右手側の横の席に着くのは、その王と同格の位の者であった。他国の王が来訪したときには、それを迎える王は、自分の右に他国の王の席を設けるのが礼儀であった。
- 御子が神の右の座に着いていることは、御子が神と等しいという意味。

(4) 14節 4節から13節までに述べたことのまとめ

① 御子は任務を終えて座っているが、天使たちは、今でも忙しく彼らの任務に従事している。天使は「仕える霊たち」である。

- 著者は、「仕える」というギリシア語に、一般的な「しもべ」とか「奴隸」という意味の単語を使わずに、「宗教的に献身する」という意味の単語を使っている。これは、天使たちが「自由意思に基づき、志願して他者の下で活動する代理人たち」という立場にあることを表現している。

② 天使たちは救いの相続者となる人たちのため遣わされる

- 天使たちには、私たち信者を世話する任務が与えられる
- その世話は、私たちが幼子の時に始まり（マタ 18:10）、一生涯続く（詩 91:11）。
- 信者の身には悪いことは何も起こらないようにしてくれるということではない。神のみこころの外側で事が起こるようなことはない。
- 天使の役割：私たちが口にすることばを観察している（伝道 5:6）、私たちの苦しみを観察している（I コリ 4:9）、私たちがどういう服装をするかも観察している（I コリ 11:10）
- 信者が死ぬと、その人の霊魂は天使たちによって天へエスコートされる（ルカ 16:22）

2. 警告① 「信仰を見失うことの危険について」 2:1~4

(1) 1節 それゆえ=ここまで論じてきたことを受けて

(2) 1節 聞いたこと=主イエスが語り、それを聞いた人たち（使徒）が、確かなものとして私たちに示したこと（3節）=御子によって与えられた新しい啓示

(3) 1節 押し流されないように

- ① ボートを係留していたロープがするりと解けて（ほどけて）、ボートが漂流してしまふ → 見えなくなってしまう → 記憶から消えてしまふ
- ② 旧約聖書のヘブル語を同じギリシア語で七十人訳が訳した箇所は

- 箴言 3:21 見失う
- イザヤ 44:4 流れ（流れては去っていく水）

(4) 2節 御使いたちを通して語られたみことば：モーセの律法（シナイ契約）は天使たちを通して与えられたというのが、ユダヤ教ラビたちの教え。

- ① 申 33 : 2 「主はシナイから来られ、セイルから彼らを照らし、パランの山から光を放ち、メリバテ・カデシュ (千よろずの聖なる者たち=天使たち) から近づかれた。その右の手からは、彼らに稲妻がきらめいていた」
- ② 詩 68 : 17 「主のいくさ車 (=天使たち) は幾千万と数知れず、主がその中におられる。シナイが聖の中にあるように。」
- ③ 新約聖書は 3 回、ラビたちの教えが正しかったことを確認している
- 使徒 7 : 53 「御使いたちによって定められた律法」
 - ガラ 3 : 19 「御使いたちを通して (ひとりの) 仲介者の手で定められた」
 - ヘブ 2 : 2 「御使いたちを通して語られたみことば」
- (5) 2 節 すべての違反と不従順が当然の処罰を受けた
- ① 処罰は、肉体的な処罰であって、霊的救いを失うことではない。
- アロンの二人の息子、ナダブとアビフ (レビ 10 章)
 - 民数記 16 章には 3 人の反乱首謀者、コラ、ダタン、アビラム
 - ヨシュア 7 章、アカン
- (6) 3 節 ないがしろにする **ギ** の意味は、「注意や関心を向けない、無関心・冷淡になる」→ 神は、信者が彼らの救いについて無関心になることを容認しない。
- (7) 3 節 どうしてのがれることができましよう = 御子による救いに無関心になったら、「当然の処罰」(2 節) から逃れることはできない
- ① ヘブル人への手紙の文脈上は、紀元 70 年に迫っている「エルサレム陥落とそれに伴うユダヤ人たちの膨大な数の戦没者」
- ② 一般的な信者への適用は、12 : 5~11 「主の懲らしめ」
- ③ いずれも、霊的な救いを失うことではない。不従順を続けると、肉体的な懲らしめを受けることにつながり、最終的には肉体の死をもたらす。
- (8) 3 節 b~4 節 新約の福音は、モーセの律法よりも優る。その 3 つの事柄
- ① 最初、主によって語られた
- ② 主から聞いた人たち (使徒) が確かなこととして伝え続けた
- ③ しるしと不思議、さまざまの力あるわざ、聖霊の賜物によって証明された
- 神は、使徒たちが語るときに、これらの方法で認証された。
 - 「しるし」: 神がある目的をもって行わせる奇跡で、その奇跡によって神の目的が明らかにされる。あるいは、宣教をしている使徒たちの言っていることが正しいことを示すための奇跡。
 - 「不思議」: しるしが人々の間にもたらす関心や驚きの面を表現する
 - 「さまざまの力あるわざ」: 直訳すると「多重に積み重なった力たち」、しるしが神の力を源としていることを表現することば
 - 「聖霊の賜物 (複数形)」: (1 コ 12 : 7~11)

3. 御子は「神 - 人」として人の面をもつが、この面でも天使たちに優る 2:5~18
- (1) 「後の世(世界^ギオイコウメネ「人が住む地上界」)」=メシアの王国 の統治権は、天使ではなく、人としてのメシアに与えられている 2:5~9
- ① 6~8節 詩8:5~7
- 神は人を天使よりも低いものに造ったが、栄光と誉れの冠を与え、万物をその足の下に従わせた=この地上の支配権は人(アダム)に与えられた。
 - 言外に、【アダムが罪に墜ちたとき、彼はその支配権を失った。このときサタンは地上の支配権を奪ったので、今の世を支配するのは、サタンとその配下にある悪霊たちである】
 - 8節 神が人を造り、地上の支配権を人に与えたのだから、必ずそのようになる。しかし、今はまだそれが成就していない
- ② 9節 その支配権を回復し、行使するお方は、(人としての面を強調して)「イエス」である。そのための「栄光と誉れの冠」を、すでに十字架の死によって受けておられる。
- ③ 子なる神が人となられ、十字架で死なれた。その動機は、神の恵みである。
- (2) メシアが人となられた理由(人でなければ、死ねない)→十字架の死は何を目的としていたか、4つの目的 2:10~18
- (3) 第一の目的:多くの子たちを栄光に導くため 2:10~13
- ① 10節 救いの創始者=救いを「支配し、リードする」お方。イエスは、私たちの支配者であり、導き手である。
- 苦しみを通して全うされた:「全うされた」とは、「ゴールに着いた」という意味。イエスは、苦しみを通して、目指していたゴールに着かれた。彼の人としての面は、苦しみを通して完成された。
 - 多くの子たち:イスラエル民族は「神の子たち」(出4:22~23)、しかし、その中の信仰ある者たちだけが、栄光を受ける。
 - 万物の存在の目的であり、また原因であるお方として、ふさわしい:イエスは、神のみこころに従った
- ② 11節 イエスは、私たちが聖なる者としてくださるお方である
- 「聖とする方」=メシア(10:10、13:12)
 - 「聖とされる者たち」=信者たち(10:14)
- ③ 12節 詩22:22 復活のあとのメシアとイスラエルとの関係
- ④ 13節 a イザ8:17 預言者イザヤは神がイスラエルを救ってくださると信頼している → へブル人への手紙の文脈では、メシアが父なる神に信頼していると言っている。メシアは今、父なる神によって彼の敵たちが服従させられるのを天で待っておられる。
- ⑤ 13節 b イザ8:18 預言者イザヤの二人の子は、当時のイスラエルに対するしるし → へブル人への手紙の文脈では、将来、再臨のとき、イスラエルの信仰ある残れる者たちと御子との関係を指す。

- (4) 第二の目的：死の君を打ち破るため 2:14
- ① 子たちはみな血と肉とを「持っている」ので：「持っている^ギコイノニア 共通のものとして持っている」→イエスが人と共通のものとして持たれたのは、血と肉。人の罪は持たなかった。
 - ② 主もまた同じように、これらのものを「お持ちになりました」：原語の意味は「何かの中にいる」、「本来はその性質にはそぐわない何かを持っている」。神が血と肉を持つというのは、神の性質にはそぐわないが、子なる神はその神性に加えて、血と肉という人の要素をお持ちになった。
 - ③ 血と肉を持つことで、子なる神、御子は、死ぬことができるようになった。そして、その死によって、サタンを無力化した。「滅ぼす^ギカタルゲオ（破壊するではなく）無力化する」
 - ④ サタンの力とは、「死の力」。旧約時代は、サタンは、人の肉体の死についての権威を持っていた（信者も、不信者も、すべて）。新約時代の今は、サタンは信者については権威を持たない。例外はIコリ5:1~5。
 - ⑤ メシアの対抗武器は永遠のいのち、それを死ぬことによって手にした。
 - ⑥ メシアは、私たちにとって、サタンを征服したお方である。
- (5) 第三の目的：信者を解放するため 2:15
- ① 生まれながらの人々は、死に対する恐怖に捕えられている。確かに、不信者にとって死は罰である。
 - ② しかし、信者にとって、肉体の死は、もはや罰ではない。死によって、天に入るのである（ピリ1:21~23）
 - ③ 信者は、死の恐怖からも、死そのものからも、解放されている（Iコリ15:55）
- (6) 第四の目的：人を救うため 2:16~18
- ① 16節 救いの対象は、人であって、天使ではない。墮落した天使たち（サタンと悪霊たち）も存在するが、神は彼らを救いの対象とはしなかった。神は、「墮落した人」を救いの対象となさった。
 - ② 人が救いの対象だから、子なる神は、天使にはならず、人となった、とも言える。人、しかも「アブラハムの子孫」=ユダヤ人であった。
 - ③ 17節 メシアのみわざの中心は、贖いである。ユダヤ人となられたのは、3つの理由がある。
 - あわれみ深くなる：人格において
 - 忠実になる：祭司として役割を遂行するうえで
 - 大祭司になる：5:1にもあるように、人でなければ祭司にはなれない。祭司になることで、メシアは「なだめをする」ことができる。
 - ④ なだめをする：神の怒りを鎮める。イエスの死によって、神はその怒りを鎮められた。罪に対する神の怒りは、おさまった。「その民」=イスラエルの罪のために御子の血が身代わりとなって支払われたことで、神の義の要求は満足

された。

- ⑤ 14節から17節までの教えの背景にあるのは、旧約聖書における「血縁者による贖い」。モーセの律法のもとでは、もしあるユダヤ人が債務を支払うことができなくなったら、6年間奴隷になり、7年目には解放される。奴隷になったら、次には2つの選択肢がある。6年間働いて7年目を待つか、血縁者による贖いを受けるかの二つ。もし、2番目ができれば、7年目を待たずに解放される。
- ⑥ 血縁者による贖いの条件は、3つ。血縁関係があること。贖いの代価を持っていること。喜んで代価を支払うこと、つまりこれは義務ではなく、自発的な意志によること。
- ⑦ 聖書は、罪を犯す者は罪の奴隷であると教えている。これは、ユダヤ人に限らず、すべての人に当てはまる。すべての人が罪人である。このことに加えて、ユダヤ人はさらに律法の呪いのもとにある。彼らは律法を守ることができないからである。
- ⑧ イエスは、血縁者による贖いにおける3つの条件をすべて満たしている。人としての血と肉を持っているという点ですべての人と、そしてアブラハムの子孫として生まれたということでユダヤ人と、血縁関係にある。2番目に贖いの代価、これは罪のない人の血である。イエスは歴史上、モーセの律法を完全に守った、ただ一人のユダヤ人である。イエスは罪のない血を持っていた。3番目に、彼は進んで代価を払った。「誰もわたしから命を取る者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです」(ヨハ10:18)
- ⑨ 18節 主はすべての点で兄弟たちと同じようになった → どのような点か？ 苦しみと試み。
- ⑩ メシアが私たちに助けることができるのは、メシアは試みを受け、そしてメシアも苦しめられたから。苦しんだからこそ、誘惑を受けている人たちを助けることができる。
 - 「助ける」原語の意味は「叫んでいる人のところに走っていく」→ イエスは、試みの中であって苦しんでいる信者のところに、走って行って、助けてくださる。
 - イエスは、私たちの弱さや苦しみをよく理解し、同情して、助けてくださるお方である。